Kwansei Gakuin University

パウロがその時ここで言っている意味という事は全く歴史的な事柄であり、先の判断基礎が妥当する。しかし吾々は聖書を第一には福音を宣べ伝えるものとして捉えるのであって、この福音を明らかにする為に歴史を方法として用いるのである。では方法としての歴史は絶対的なのだろうか。しかし歴史を方法とした福音理解は何か三人称的な感じがし、福音という〝私〟にかかわる一人称的なものが希薄であるようにも思われる。では、ある意味で直接一人称的な解釈、いわゆる霊的解釈の方がより優れているのか。しかしそれによって解釈の客観性が失われる危険があるのは事実であり、各自が自分勝手な解釈に閉じ込もる危険性がある。主観性と客観性、霊と文字、アレゴリカルとリテラル、この二極間の問題こそ古くから問われてきたことであるのである。これらが様々なニュアンスとアクセントをもって聖書解釈の歴史は展開してきたのであり、本書を通して吾々はその息吹を感ずるのである。歴史よりも信仰義認の使信を基盤に旧約を解釈したパウロ、又歴史よりも慈しみ深い神にふさわしい意味を見出そうとしてアレゴリカルな解釈を展開したオリゲネス、それに対し解釈は実際に語られたことを超えてはならないとして歴史的解釈にアクセントを置くアンティオキア学派等を通して、吾々は聖書解釈という事柄についてより一層深く、豊かに考えることが出来るのである。

最後に若干の批判と要望を記しておきたい。まず他の書評の中でも述べられていることであるが、訳語の不統一が挙げられる。例えばアウグスティヌスのDe doctrina christianaの訳語がまちまちである。又茂泉氏がアウグスティヌスのテキストとして挙げているミーニュ版が適切かどうかも少し疑問である。又本書で取り扱われてないものとしていくつかがあるが、中でも何故ギリシャ正教が入っていないのか少し不思議である。本書の性格からして全てを取り扱うことが出来ないとしても、ギリシャ正教の流れは教会史の中で大きな位置を占めるはずであり、是非とも取り扱ってほしかった。以上気付いた点を少し挙げたが、そういった点は別にして本書は吾々の聖書解釈についての思惟にとって、一つの案内役を果すものであるのであり、その意味で評価されるべきであろう。

『新約聖書正典の成立』

荒井　献編

（A5版・三七五頁・四五〇〇円）
日本基督教団出版局刊・一九八八年

藤原　一二三

今日、われわれは、「聖書をどう読むのか」という課題の前に、しばしば立たされる。それは、われわれが手にしている聖書文書が、ある時、ある所で、ある目的に基づいて書かれ、また読まれたものであるのだが、その文書が、今日のわれわれにどのようにかかわるのか、また正典としての聖書を読むとはど

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

ういうことなのか、という二重三重に絡みついた問いでもある。

「聖書を読む」ということが、人間の歴史的行為と何らかのかかわりがあるとするならば、なおさら「聖書をどのように読むのか」という課題を追求しなければならないであろう。われわれの歴史上に生起し、今日もなお残されている「ユダヤ人迫害」の記録を見るとき、「聖書とは何か」「聖書をどのように読むのか」という課題の大きさに驚かされる。

本書を読みながら、キリスト教の出発の歴史は、旧約聖書（またはユダヤ教）をどのように受容するのか、また受容しないのか、いわばユダヤ教（ユダヤ人）との葛藤の歴史であったことが、改めて思い起される。そして今日のキリスト教徒が、正典としての聖書のなかに、ユダヤ的なものを保持しつつ、これをどのように読み、新たな地平へ立とうと努力しているのか、今も問われていることが分かる。

しかしそれは、われわれが勝手に聖書を読むということを意味しない。むしろ、キリスト教徒の先祖たち（異端と判定された人びとをも含めて）、使徒教父、西方、東方教会の教父たち、また中世のスコラ学者たち、さらに宗教改革者たち（異端と判定された人びとをも含めて）、いわばこの歴史に登場した全ての人々と共に、「聖書を読む」ことを意味するであろう。

「聖書の正典史」というものは、単に「正統的」という針だけで貫き通したものではない。むしろ、「正統」と「異端」に分類されてしまわない、混沌とした歴史全体を言うのだと思っている。

その意味で本書は、われわれの要求にかなり答えてくれている。本書を通読すると、それぞれの時代の中で、どのように聖書（旧約・新約共に）を受容していったのか、どのようにして、聖書の「正典化」がおこなわれたのかがよく分かる。しかしこのような形では限りがあって、問題点が掘り下げられない。この書の出版を機に、次の企画を考えていただきたい。それは、ここに執筆しておられる専門家の方々、またここに参加しておられない専門家の方々が、テーマや人物をめぐって多方面から討議し、あるいは解釈や思想の相違をぶつけ合って、重層的でダイナミックな「正典史」を提供していただきたいということである。

例えば、あらゆる意味で、キリスト教史の分岐点に立った重要人物は、「マルキオン」ではないか、とわたしは思っている。従来のように「マルキオン」は「異端」であった、という視点からの論述には興味もないし、恐らくそこからは何も生まれて来ないし、生まれても来なかった。この度、井谷氏の労によって、日本語の一般書で、これだけ掘り下げ、整理された形で「マルキオン」が提供されたのは、初めてではないか、と思う。感謝したい。ここには、「聖書を読む」ための多くの鍵が隠されている。

「マルキオンがいなければ、少なくとも現在の形態における新約聖書正典は存在しなかったであろう」「福音書とパウロ書簡をセットにしたこと、それに限定性、排除性、規範性をも

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

たせたこと、これらはマルキオンの独創的な仕事であった」（一六三頁）。ここに客観的な評価がある。

しかし、突飛な問いだとは思うが、マルキオンが（福音の再ユダヤ化）を阻止するために、ユダヤ的なものを排除していったことは、キリスト教史の中で、ユダヤ人迫害に何らかの影響を与えたのかどうか。わたしは直接的な影響はなかったと考えている。むしろ、ユダヤ的なものを全て保持した、旧約聖書、新約聖書を正典として受容し、これらを予言の成就、キリストの復活信仰という視点から読んでいくのだとする「正統的教会」の側に、ユダヤ人迫害を認容する契機があると考えている。いずれこの課題も問い直したいものである。

わたしは、この限られた紙面で、本書に執筆されておられる方々の労作に対して、個々に取り上げて論じようと思っていたが、与えられた枚数をはるかに越えることになったので、いずれ別の機会に取りあげたいと思う。

本書は、Ⅰ「新約聖書正典前史」、Ⅱ「新約聖書正典の成立期」、Ⅲ「新約聖書正典の成立」の大枠の中で、主要な項目、人物について論じられている。Ⅰでは、パウロと四福音書における旧約聖書の受容、また伝承の問題を論じた「新約聖書の人々」（川島貞雄）。ポリュカルポス、第一クレメンス、イグナティオスなどの使徒教父の旧約聖書の受容、新約諸文書の受容の具体例を示しながら、極めて明確に論じた「使徒教父」（青野太潮）。今まで多くの研究書を世に問い、今般正典史の中で、グノーシス派の「聖書」解釈（原理）、ヨハネによる福音書のグノーシス的釈義の例も示した、編者でもある荒井献氏の「グノーシス派」。Ⅱでは、本書の中心というべき、新約聖書の正典化に大きな影響を与えた五名の人物、「マルキオン」（井谷嘉男）、「ユスティノス」（大貫隆）、「タティアノス」（大貫隆）、「テルトゥリアヌス」（井谷嘉男）が論じられている。Ⅲでは、教会が西方、東方教会と分かれたなかでの新約聖書正典化への具体的な経過が論じられている。「西方教会」を執筆した宮谷氏は、極めて具体的にかつ簡潔に、二〇近い人物と項目に対して細部に渡って配慮して論じている。「東方教会」と「教会会議」は三小田敏雄氏が担当している。本書の出版を喜ぶと共に、これが多くの方々に読まれることを祈るものである。

『聖　餐』

日本基督教団宣教研究所編

（B6版・二七八頁・一八〇〇円）
日本基督教団出版局刊・一九八七年

大阪聖和教会牧師　森田　喜之

日本基督教団宣教研究所は、教会・教職・聖礼典に関する見解の相違と対立が、各教区の活動に著しい影響を与えているという調査結果を得、これをむしろ積極的にとらえて、論議を掘

NII-Electronic Library Service